

のだから、父にとっても無関係ではありえない。かならず父を苦しめるものであった。ある点で父を巻き添えにしないではおかぬものでもあったろう。それでいてやはり、父からすれば、困難に絡みとられているのはわが息子なのである。こうした間柄というものは、どんな類いのふるまいであれ、変化を加えたり破壊したりできるものではない。このことに息子は気づいていた。まさに気づいていたからこそ、うしななってしまった尊敬をはっきり知ったのである。(…)

神のあわれみとは

このように放蕩息子の精神状態を正確に描いてみれば、神のあわれみが何に存しているかを、わたくしたちは正確に理解できよう。単純だが透徹したこの比喩で、父のすがたは、疑いもなく御父としての神をあきらかにしてくれる。たとえ話のなかの父のふるまい、その全行動は、父の内面の態度のあらわれである。おかげで、あわれみについての、旧約に独特な一貫した見地を、わたくしたちは再発見できるし、しかも今やそれは、まるっきり一新され、あふれるほどの単純さと奥行きを加えて、総合されている。放蕩息子の父親は、父であることに忠実である。子のうえにいつもふりそそいでいた愛情に忠実である。たとえ話にあつては、散財のあと息子が帰還したときただちに歓迎してみせた覚悟のほどに、父性に対する父の忠実さが表現されている。しかしそれだけではない。それはまた、父のあの喜びのうちにもさらに十分に表現されている。喜びの祝宴は盛大で、兄の反感と憎悪をひきおこしたほどである。兄は父のものを去ったこともなく、家を捨てたこともないひとだったのだから。

父が、父であることに忠実だということ——これはすでに旧約において「ヘセド」といふ言葉で知られている特質だが、このたとえ

話の父親の、ことに情愛こまやかな仕草のうちにも、言い表わされていよう。じつに、放蕩息子の帰還を見つけた父は「あわれに思い、走りよって、かれの首をだき、接吻をあげせよ」と書かれていたのである。たしかに父のこの行動は、深い愛情がなされたものであり、こうした愛情があつたからこそ、息子に對する父の寛大さ、あれほど兄の怒りをおかした寛大さにも納得がいくわけであろう。しかしこうした感情の原因は、もっと深いところに探らねばならない。目を向けていただきたい、父は知っているのだ、基本的な善は救われている、と。すなわち息子の人間性という善である。財産の分け前を息子はつかい果たしてしまつたけれど、しかしその人間性は救われていた。じつさい、ある意味で、それはふたたび見出されたのである。兄に言つた父の言葉がこれを語っている。「あなたのあの弟は、死んでいったのが生き返り、見失つたのを見つけたのだから、祝い喜ぶのは当然なはずである。」「ルカによる聖福音」のおなじ第十五章には、見つけられた羊のたとえ、さらに、見つけられた銀貨のたとえを見ることができ。いずれのたとえでも、放蕩息子の話にあらわれるこのおなじ喜びに、力点がおかれている。うしなわれた息子の人間性、子の尊厳に、父性に対する父の忠実さは収斂していく。なによりもこういうわけで、息子の帰還を父は喜ばしく感じたのである。

子と人としての尊厳をとりもどす

続けられ、だからこう言えるであろう。子への愛があるから、父性の本質そのものから湧き出る愛があるから、たぶん父親は子の尊厳に關心をもたざるをえなくなる、と。この關心が、父の抱く愛の尺度である。それは、聖パウロが次のように書くであろう愛のことだ。「愛は寛容で、情あつく……自分の利を求めず、憤らず、人からの不義を気にせず……

……真理を喜び……すべてを希望し、すべてを耐えしのぶ」そして「愛は、いつまでも絶えることがない」。放蕩息子のたとえでキリストが示しているように、あわれみにはその内的な形式として愛がある。それを新約は「アガペー」とよぶ。この愛は手をさしのべる、あらゆる放蕩息子に、あらゆる人間の悲惨に、とりわけあらゆる形の道徳的な悲惨——罪に對して。そのとき、あわれみを受けた人が侮辱されたと思ふことはない。むしろ、ふたたび見出されたと思ふ「ふたたび値打あるものにされた」と感じるのである。父が子に向かつてまっさきに言い表わすのは、自分の喜びである。子が「ふたたび見出され」「生き返つた」といふ喜びである。この喜びによって、ひとつの、もとに変わらぬ幸福が指し示される。すなわち、放蕩はしても、依然として息子は真に父の子であるという幸福。さらに、もうひとつの、ふたたび見出された幸福もある。放蕩息子の場合でいえば、かれが自分本来の姿をとりもどしたことである。

あわれみは人を軽くみることが?

キリストのこのたとえ話のなかで父と子の関係のなかに生じたことを「外から」評価してはならない。あわれみについて思い抱かれる偏見はだいたい、あわれみを外からしか賞賛しない結果である。こうした評価の仕方にしたがえば、あわれみのうちに、あわれみをほどこすひとあわれみを受けるとのあいだの、不平等な関係をしか見ないことが、時としてある。その挙句、あわれみは受け手を矮小化するもの、人間の尊厳を傷つけるもの、と性急に結論づけるのである。放蕩息子のたとえを見れば現実には全くちがっている。あわれみの関係がその基に置いているのは、人間という善についての共通経験、人間に固有な尊厳についての共通経験である。この共通経験があつたので、放蕩息子は自分と自分の

行動のほんとうの意味を、十分に見きわめはじめ。(こうして真の意味を見きわめることが、謙遜の純粹なありかたである。)そして、まさにこのゆえに、放蕩息子は父にとつて特別な幸いともなるのである。父が紛うかたなく見つけた幸いとは、真理と愛の神秘的放射によって成就された幸福、子のおかしたすべての悪を忘れてしまえるという幸福である。

回心するとは?

放蕩息子のたとえは、回心とは何かを、素朴にしかし奥深く語っている。人間の世界における愛のはたらきとあわれみを、もっとも具体的にあらわすものが、回心である。道徳的、身体的、物質的な悪をどれほど洞察し同情的に見つめたとしても、それだけのところにあわれみの真の、また特有の意味が存するわけではない。あわれみの真の在りよう、固有のありようがあらわされて来るのは、この世と人間のうちに存在するすべての悪から善を抜き出し、ふたたび値打あるものとし、さらに価値の高いものにするときなのである。あわれみをこころい風で理解したとき、あわれみこそ、救い主たるキリストの使命の根本的な内容、キリストの使命の本質的なものからなるのである。キリストの弟子たち、後継者たちは、あわれみをこのように理解し実行してきた。その人びとの心と行動のなかで、あわれみは自らの姿を絶えずあきらかにしてきたのである。あわれみは、とくに創造的な愛の証拠、悪に征服される「ことなく」善によって悪に打ち勝つ「愛を生み出す、そのような愛の証明だったのである。あわれみのほんとうの姿はつねに新たにされて呈示されねばならぬ。偏見は多い。にもかかわらずしかし、あわれみは現代にあつて殊に必要なのである。

以上は回勅《あわれみの神》の一部の試訳です。公式訳はいずれ中央協議会からする予定です。

説教・講話・書簡等の抄記

「ご聖体の奥義」

ローマで世界中から集まった学生へ

イエズスは、カファルナウムの会堂ではつきり言われました。「私は天から下ったパンである。私が与えるパンは世の生命となる私の肉である。私の肉は真の食物であり、私の血は真の飲み物である。これが天から下ったパンである。先祖たちが食べても死んだパンのようではない。(ヨハネ6:51、他参照) ユダヤ人の考え方や感じ方とは衝突すると思われるのですが、イエズスは「肉」「血」「食べる」「飲む」という語をお使いになりました。イエズスは象徴的ではなく、ご自分の真の人格全体について現実的に話されました。ご自分が十字架の犠牲のまえ「最後の晩さん」の時はじめて捧げる「燔祭」のさげ物であること、およびその燔祭がミサ聖祭を通して代々に至るまで伝えられることをお示しになったのです。この信仰の神秘を前にしては、ひざまずいて、沈黙のうちに礼拝と賛美をささげるほかありません。

『キリストに倣いて』は、「この計り知れない神秘である秘跡に関して、好奇心から出る無益な詮索をさげよ」と言います。神のみいつを詮索する者はその光栄に圧倒される」と。

故パウロ六世は、「神の民のクレド」の中で、トリエント公会議の教えと回勅「信仰の神秘」を要約して、次のように言っておられます。「キリストがこのようにこの秘跡のうちに現存なさることは、ただ、人間の五官が受けとるパンとぶどう酒の属性のみが変化せず、そのまま残りながら、パンの実体そのものがキリストの御体に変化し、ぶどう酒の実体そ

のものがキリストの御血に変わることによってのみ可能である。この神秘的変化を教会はきわめて適切に『全実体変化』と呼んでいる。教会の教父たちは総て、ご聖体における神

の現存の事実を常に主張してきました。たとえ哲学者ユスティヌスが著書『護教論』のなかで、謙遜で喜びにみちた礼拝を勧めています。「折りと感謝を終えて、出席した全会衆はアーメンと叫んだ。『アーメン』とはヘブライ語で、そうなりますように」という意味である。(…)我々が飲食するのは普通のパンや飲物ではなく、イエズス・キリストが人の救いのためにお取りになった血と肉である。『神から出るみことば』への祈りと感謝の祈りによって、身体を養う食物は、人となられたイエズス御自身の御体と御血になると教えられている。

それゆえ、皆さんにお願いしたい。ご聖体を深く信じる祈りの人であってください。敬虔でまじめな態度で、意識して、典礼法規を完全に守ってください。典礼法規への忠実がご聖体に対する親しみや優しい愛をうばうことはありえないのです。

「ご聖体は救いをあらわす」

イエズスは、「生命のパン」についてのお話に付け加えられました。「このパンを食べる者は永遠に生きるであろう。人の子の肉を食べずその血を飲まなければ、あなたたちの中には生命がない。私の肉を食べ私の血を飲む者は永遠の生命を有し、終りの日に私はその人々を復活させる。」

この箇所ではイエズスは、「永遠の生命」「光栄ある復活」「最後の日」について話しておられます。しかし、イエズスがこの世の生活を忘

れたり軽んじたりなさったのではありません。イエズスご自身、各自が上手に運用すべきタレントについてお話になりましたし、いろいろな隷属状態や抑圧から少しづつ解放され、人間としての生活が改善されるに役立つ業をお喜びになります。とはいえ、歴史的現世的内在論をうけられるような誤りを犯す必要はありません。永遠の光栄ある生命にたどりつくために歴史を通り抜けることは必要です。それは、骨の折れるつらい、しかもはっきりしない歩みかもしれませんが、そうであるからこそ私たちの歩みには功德があるのです。イエズスは生きておられ、私たちの日々の生活に現存しておられます。不滅で幸福な真の終着駅に私たちがたどりつけるように助けてくださるためなのです。

キリストと一緒になければ、道に迷い、混乱し、絶望することさえ避けられないでしょう。神学にも明るい詩の天才・信仰の人・世界の人ダントは聡明にもこのことを直感して、煉獄の靈魂が祈る「天にまします」を次のように解説しています。人生という苛酷な砂漠において、新約の「マンナ」「天から下ったパン」であるイエズスとの親密な一致がなければ、人は自分の力だけで前進しようとしても、実際には後退することになる。

「日々のマンナを今日も与えられよ。この苛酷な砂漠にあっては前進せんともかくほどに後退を余儀なくされる、マンナがなければ。」(煉獄編11・13・15)

ご聖体を通してのみキリスト信者は、英雄的に諸徳を実行することができます。すなわち敵を赦し、苦しみを与える者さえも愛し、隣人のために自分の生命をささげる愛徳、年齢・境遇を問わない貞潔な生活、歴史や人生の舞台で神の沈黙に当惑するときや特に苦痛における忍耐など。それゆえ、正真正銘のキリスト信者であるために、いつもご聖体を大切にする人であって欲しいのです。

「ご聖体は内的改革をもたらす」

次のおこぼは、強烈な印象を与える非常に重大な発言です。「私の肉はまことの食べ物であり、私の血はまことの飲み物である。私の肉を食べ、私の血を飲む人は私におり、私もその中にいる。生きておられる御父が私をつかわし、そのおん父によって私が生きているように、私を食べる人も私によって生きる。」重大なおこぼは、厳しいおこぼです。ご聖体とは内的改革をもたらすものであり、生涯の生命をかけた約束です。聖パウロは言っています。「もはや私が生きるのではなく、キリストが私において生きておられる。そのキリストとは十字架につけられたキリストなのです。ご聖体を拝領するとは、キリストにかかわること、そしてキリストにとどまり、キリストのために生きるという意味です。キリスト信者は結局ただ一つの野心、ただ一つのために生きることにあります。つまり、キリストの対的な従順、人生を受け入れること、愛徳の実行に自分をささげること、厳しいながらも理解ある善意、においてキリストをならわなければならぬのです。したがって、ご聖体は人生の目標となるのです。」

この祈りのしめくりとして、皆さん方のことを聖母におねがいいたします。聖母は三十三年にわたって、イエズスをみつめながら生き、神の御子を心をこめて大切にさいました。その聖母に、ご聖体に近づきみなさん方につきそってくださるようお願いいたします。(…)最後に、思い出深い前教皇の「神はつねに御目をそいでくださっている。夜のとほりに閉ざされているようなときにも」という優しいお言葉を思い出して、具体的な行ないにあらわれる愛徳を実行し、み摂理には穏やかにすべてを委託して、喜びのたね播き人となってくださいようお願いします。(一九七九年八月九日)

不変の教え

方法の種類

要理教育は、信仰の教育と言う固有の目的を実現するために、志願者の年齢および精神の発育、教会的かつ霊的成熟、その他それらの事情によって種々の方法を用いなければならぬ。(…)

啓示と回心への奉仕

最初に出会う問題は、要理の授業を、明らかな或いは仮面をかぶった特に社会政治的なイデオロギー論、または個人の政治的選択と不当に混合しようとする危険と誘惑である。このような態度は、第一に伝えなければならぬメッセージをあいまいにし、また第二義的なものにし、その上、自分の説に従わせようとする。そうすると、要理教育は根底からくつがえされる。シノドスは、当然のことながら、要理教育が、似たような問題に対する神学的解釈の分野でも、一段高いところにとどまって、相反する憶説から遠ざかるよう――

面断法をさけるよう――強調した。なぜなら、要理教育は、啓示、つまり、教会の普遍的教導権が盛式、あるいは通常の形で啓示として教えることに一致する必要がある。これは、創造主かつ贖い主である神、そして私たちのところに来て、私たちの肉を取り、それぞれ人間だけでなく、人類の歴史の中に入られ、その中心となられるみ子を示すことである。それで、この啓示は、イエズス・キリストの福音の影響の下での人間および宇宙の根本的改造と人間存在の構造全体の改造に関するものである。このような意味の要理教育は、真のキリスト教道徳の教えも含むものではあるが、すべての形式的道徳主義を越えるものである。とくに、それはすべての型の現世的、社会的あるいは政治的「メッセシア主義」を越える。人間の内にある究極のものを知らうとするからである。

メッセージの文化への移入
ここで私は第二の問題を取り上げなければ

ならない。聖書委員会の会員に言ったように、文化接触、またはフランス語の「インクルツラシオン」は、「新語であるが、託身の大きな秘義の要素の一つを立派に表わしている」。福音宣教一般と同じように、要理教育についても、それが文化あるいは諸文化の内部に福音の力を持ち込む使命をもっていると言いうことができる。これを実現するには、そのような文化とその主要要素を知り、その最も意味深い表現を見極め、その特殊な価値と富を尊重する必要がある。このようにして、隠れた秘義を種々の型の文化の人々に認めさせ、自分たちの生きた伝統からキリスト教の生活と祭儀と考え方を表わす特殊な仕方を引き出せるようにする。しかし、この問題に関しては、次の二点を考慮に入れる必要がある。すなわち、一方で、福音のメッセージは、それが最

初にはめ込まれた文化(すなわち、聖書の世界、とくにナザレのイエズスの文化的生活環境)や、時代の推移の中で福音伝達の場となった文化形態から、重大な損失なしに分離することはできない。それはある文化的土壌から自然に発生するものではない。そして、それは、必ず諸文化のある対話に含まれる使徒的対話を通して常に伝達される。

他方、福音の力は、どこにおいても変質させ、また再生させる性質をもつものであると言わなければならぬ。それが文化に浸透するとき、これの多くの要素が改善されても、だれも怪しまないであろう。もし福音そのものが、文化に触れて変わるなら、要理教育は存在しないであろう。このことが忘れられたら、「キリストの十字架を無にする」と言う聖パウロの言葉が現実となるであろう。

『要理教育に関する使徒的勧告』第五回 要理教育の方法

キリスト教の秘義の全体をよりよく理解させるため、ある集団、または階級のいわゆる文化遺産にぞくする宗教的、またはその他の要素を賢明かつ慎重に用いる方法は全く別である。真の要理教師は、要理教育が種々の文化形態あるいは種々の生活の枠の中に組み込まれることをよく知っている。それは、互いにこのように違った民族、現代の青少年、現代人の種々の生活環境を考えれば十分である。それだからと言って、信仰の「良い遺産」をそこう用語を取り入れたり、あるいは信仰道徳の問題で譲歩したりして、自分のメッセージを放棄し、あるいは省略し、要理教育を貧困化することを退ける。なぜなら、要理教育は、そのような文化が内にかかえている不完全な、あるいは非人間的な要素を抜き去るのを助け、それに内在する正しい価値にキ

リストの十全さを与えて、そのような文化を豊かにすると確信しているからである。

暗記

方法論の最後の問題で明らかにされなければならないのは、暗記に関するものである。これはシノドスにおいてしばしば論議されたものである。要理教育の初め頃は、文化が主として口頭で伝えられていた時代とあって、暗記が広く用いられていた。それで、要理教育においても長い間、主な真理を暗記する習慣ができた。このような方法にある種の不都合な点があることを私たちは承知している。すべての知識を深めないまま文句の繰り返しにして仕舞い、不十分な、ときとしては少しの理解も与えないようなことは決して許さないことではない。このような不便が、現代文化の種々の特徴と一つになって、あちこちで、

要理教育における暗記の実行をほとんど完全に――残念なことにも永久に言うものもないではない――廃止するものとなった。それにもかかわらず、シノドスの第四総会の機会に、反省、自発性、対話、沈黙、宿題および暗記の役割の間に正しい均衡が保たれるようにと、言う極めて権威あるものの発言が聞かれた。他方、ある文化においては、現在も暗記が極めて重要視されている。

それで、ある国々の世俗の教育において、この人間的な能力、つまり、記憶の無視による損失をめぐって毎日に非難が上がっているとき、なぜ私たちが、要理教育のために、賢明にまた独自の方法でそれを再評価するよう努力していけないか。まして、救いの歴史の偉大な出来事の祭儀と記念とが、それについての正確な知識をもつことを要求しているとなれば、なおさらである。イエズスの言葉、聖書の重要なくだり、十戒、信仰宣言文、典礼文、基本的な祈り、教理の基礎概念などは、キリスト信者である若者たちの品位に反したり、あるいは主との個人的対話にさわたりしただけでなく、シノドスの教父たちも強調したように、実際に必要なものである。私たちは事実を眺めなければならない。もし言えるなら、信仰と信心の花は、記憶力が使われないような要理教育の不毛の土地には咲かない。大事なことは、暗記された文句が、同時に内面化され、その深い意味が徐々に理解され、個人的かつ共同体的なキリスト信者の生活の泉となるようにすることである。

現代における要理教育の方法の多様性は、活力と才能とのしるしであることができる。とにかく、重要なことは、採用される方法が、教会のすべての生活を拘束する第一の法、すなわち、同じ愛の感情をもって、神に対して守るべき誠実と人間に対して示すべき誠実の法に究極的に関係づけられることである。

(枢機卿 里脇浅次郎 中央協議会発行)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 072393